

# 価値判断過程の解析と形式化

An Analysis and Formalization of a Process of Value Judgment

長田 博泰

This article attempts to analyze a process of value judgment, and give it formal description. For this purpose, we adopt three ways of looking at concept: as a synthetic entity, this refers to its defining characteristics; as a analytic entity where value is gained in comparison to other entities; as a singular entity, where the value the entity has is as an individual, because of its uniqueness, regardless of comparisons with other similar entities. A process of value judgment is represented as a combination of the above three values or disvalues. The method is illustrated with analyzing several passages including value judgments and its effectiveness is shown.

## 1. はじめに

われわれは、日常生活のあらゆる場面で何らかの判断を行っている。判断と判断の論理的关系が推論であるから、判断がなければ推論を行うことはできない。推論することができなければ、思考することもできない。

判断は、きわめて感覚・知覚的なものから知識・経験に基づく高度なものまで含む多様な精神作用であるが、ここでは判断を真であるという意図のもとになされる断定であるとしておく。そのような判断のうち何らかの意味での評価あるいは価値観に基づく判断、つまり価値判断に焦点をあて、判断に差異をもたらす背景を探り、その差異の記述方法を考察することが本稿の目的である。

価値判断に関する過程に注目した研究はさほど多くないが、まずとり上げるべきはC.ペレルマンの研究である。ペレルマンは価値判断の論理を追求しようと研究を開始し、結局、「価値判断特有の論理学は存在しない、

しかし、現在は忘れられ軽蔑されているあの古い学問、すなわち説得説伏の術としてのレトリックに、われわれが求めるものがすでに展開されている、との発見」に至る（ペレルマン、1977=1980）。その結果、説得的言論の技術としてのレトリックとして復活させるべく『法律家の論理』（ペレルマン、1976=1986）等を著すことになる。ペレルマンの指摘以後、議論および法的議論におけるレトリックの役割に言及する研究が少なからず、現れるようになった。日本語文献に限っても、枚挙に暇がない（例えば、三輪正、1972；香西秀信、1989、1995、1998）。

議論に関する論理についていえば、論理学の影響よりは、むしろ議論の展開に力点をおくトゥールミンのモデルの影響が大きいと思われる。そのモデルに基づいて展開された例として『議論の論理』（足立幸男、1984）、『レトリック入門』（野内良三、2002）などがある。これらの研究も、結局のところ、具体的判断あるいは議論の方法、またその形式の

分析が主眼であるように思われる。相手を効果的に説得する、あるいは的確な判断を行うにはどのような手法を用いるべきかに比重がおかれている。

ここでは、価値判断過程における差異を解析するためにつぎのアプローチを採用する。まず、評価等を含む広い意味での価値判断の解析には、単に議論・判断導出の型の同定ないしは適用を分析するだけでは充分でなく、その判断に至った価値づけの背景あるいは立場を明らかにする必要がある。また、価値判断の過程は論理的推論を含みながらも、その過程は論理的に決まるものではなく、人により、ときにより、場所により異なる判断、つまり価値観によって異なる結論を展開することが可能であるから、その過程の記述には、背景・立場に基づく価値づけの変化、いいかえれば価値付け過程を表現できるものでなければならない。以上の二点を闡明するために1960年代半ばに発表された R.S. Hartman の形式価値論に基づきながら、やや異なった方法で形式化を試みる (R.S. Hartman, 1967)。

Hartman の一般的・形式的価値論の主要な論点は以下のように要約することができる。

- 1) 価値の三つの次元 (dimensions of value) を想定する、すなわち、体系的 (systemic)、外付的 (extrinsic)、内付的 (intrinsic) 価値の三つである。
- 2) 価値を内包的論理で記述する (しかし、形式的展開は行っていない)。
- 3) 特殊・個別価値論を展開するため、それぞれの次元の価値がとりうる値を属性の濃度に基づき定義し、価値間の比較・四則演算を可能にする。

これに対し、ここでは価値の三つの次元を堅持しつつ、つぎの点で異なる方法を採用する。ひとつは、三つの次元を導入した外延的論理による価値の記述・展開を試みることである。価値が本質的に内包的論理で記述され

るべきであるとしても、外延的論理による価値の記述はほとんどなされておらず、価値記述への適用に残されている課題があるはずである。いまひとつは、濃度に基づく価値の数量的扱いは現実的基盤を欠いているように思われるので、これを捨て、ここでは価値を束構造の観点から比較する方法を展開することである。最終的に価値判断過程の形式的記述方法を提示することを目指す。

本稿の構成はつぎのとおりである。次節では、まず読者の便を考慮し、本稿の問題意識と方法の概略を述べる。次いで、価値判断の差異を明らかにするために欠かせない価値付与の三つの視点を提示するとともに、その意義について強調する。4 節では、価値判断の過程を三つの視点からの価値付与として表現する方法を示す。また価値判断が価値づけの選択過程であることを図式で表現する。5 節では、以上の方法を脳死論議などに適用し、その有効性を考察する。

## 2 方法の概要

まず、本稿の問題意識と方法の概要を示しておく。詳細は次節以降で述べる。

価値判断過程を記述するには、まず何よりも事実とある種の評価を含む文を明確に区別し、その差異を簡潔に表現できなければならない。たとえば、

- (1) ジョージ・ワシントンはアメリカの初代の大統領であった。
- (2) ジョージ・ワシントンはアメリカの最も偉大な大統領であった。

は明らかに異なる。(1) は歴史的事実であり、(2) は話者の評価、価値判断である。違いは論理分析を行うまでもなく明らかである。しかし、論理分析はつぎの例が示すように価値判断過程の解析には無力な場合も少なくない。

- (3) John is a student and he likes studying.

(4) John is a student but he likes studying.

述語 Student ( $x$ ), Like ( $x, y$ ) をそれぞれ「 $x$ は大学生である」, 「 $x$ は $y$ が好きである」を表すものとすれば, 上の二つの文は論理的に同じ表現をとる:

Student ( $j$ )  $\wedge$  Like ( $j$ , studying)

つまり, 論理表現では両者を区別することはできない. 両者を区別するにはどうすればよいであろうか. 判断の差異を表現するために必要なものは何であろうか.

その準備として, 1992年(平成4年)臨時脳死及び臓器移植調査会の答申における多数意見と少数意見における「人の死」についての議論を分析する.

「まず死の決定における医学, 生物学的知見の優先であるが, 確かに, 臨床の場において個々の死の判定は医学の専権事項である. ここに危篤の病人がいる. 医師が脈を取る. 脈はない. 呼吸はない. そして, 瞳孔は開いている. 医師は『ご臨終です』と家族に告げる. この厳粛なる死の儀式において, 医師が主役を果たすことは間違いない. そして家族たちもやがて冷えていく死者の体とともに医師の判定が間違いなかったことを知る. しかしこれは, 死というものは三徴候説<sup>(1)</sup> というものによって決められていて, 個々の生か死かを判定する主役が医師にあることを意味するにすぎない. しかも医師の判定の正否がすぐに多くの人によって確かめられるのである<sup>(2)</sup>.」(脳死及び臓器移植に関する重要事項について(答申), 1992)

ここでは, ある個人の死が明瞭に三つの視点から捉えられている. すなわち, 三徴候説による死の判定者としての医師の視点, 「冷えていく死者の体とともに医師の判定」を受け入れる家族の視点, 三徴候説をもって「人の死」とする社会的視点である. これら三つの視点をそれぞれ科学的・専門的視点, 個人

的視点, 社会的視点と呼ぶことにする. その理由はつぎのとおりである. 医師の役割は, 社会的に受け入れられている死の三つの徴候を医学的に専門家の立場から判定することである. 他方, 家族の死者に対する思いはさまざまであり, これは社会的/専門的・科学的視点の還元尽きることはなく, 個別・特殊的側面を拭い去ることはできない. そして死を伝える新聞記者の立場であれば, ある人の死をその影響など社会的観点からとらえ, 記者という職業から記事を書いていると見なし

てよい. 以上から, 評価, 価値判断の次元として個人的, 社会的および科学・専門的次元を導入し, 価値判断過程をこの三つの視点すなわち三つの次元に基づく評価(価値づけ), あるいは評価しない(否定的価値づけ)として表現することにする. それぞれを I, E, S で表す.

つぎにこの三つの価値の次元に基づいて価値判断の過程を記述する方法を述べる. その前に評価・価値づけの対象について一言する. 対象自身も三つの次元から評価・価値づけされ, 認識される. 例えば, 一個人を考えてみても, 全く一私人とみなす場合もあるし, 警察官というような職業, つまり社会的観点から捉える場合もある, さらに, 人権宣言等にみられるような普遍的人類の一員として論ずる場合もあろう. したがって, 対象についても, その捉え方によって, 個別(I), 社会(E), 科学・専門(S)で表記する.

対象 X (I, E, Sのいずれか) をそれぞれ個人的, 社会的, 科学的・専門的次元で価値を付与する場合,  $X^I$ ,  $X^E$ ,  $X^S$  と表すことにする. 逆に, 対象 X をそれぞれ個人的, 社会的, 科学的・専門的次元から価値を付与しない(評価しない)場合,  $X^{-I}$ ,  $X^{-E}$ ,  $X^{-S}$ , あるいは低く評価することを明示するために  $X_I$ ,  $X_E$ ,  $X_S$  と表記する.

上に挙げた(1), (2)をこの記法で表現し

よう。(1)の「ジョージ・ワシントンはアメリカの初代の大統領であった」は歴史的事実、すなわち対象の社会的事実であるから、Eで表す。(2)はこのEを個人的視点(I)－価値基準から「最も偉大」と評価していると考えられるから、E<sup>I</sup>と表現する。

家族からみた人の死は個人の個人的視点(I)から「死」を受け入れると考えられるから、I<sup>I</sup>である。医師は個人の死を科学的・専門的観点、この場合、医学的視点(S)からの「死」の判断であるから、I<sup>S</sup>である。しかし、新聞記者は、ある個人の死をその社会的影響等に注目し(E)、専門家(S)として記事を書くから、E<sup>S</sup>と表現できるだろう。

当然、判断は幾重にも重なる。以下はそのような例である。快適にドライブしていた(E)私は警察官(S)から停止を命じられた、E<sub>S</sub>。スピードが出過ぎているのをずっと気にしていた妻(I)は、車が停止させられてほっとしている、(E<sub>S</sub>)<sup>I</sup>。しかし、私(I)は、車を止められて安心している妻に苛立ちを覚える、((E<sub>S</sub>)<sup>I</sup>)<sub>I</sub>。警察官(S)は、私の思いに関係なく、職務上スピード違反切符をきった、(((E<sub>S</sub>)<sup>I</sup>)<sub>I</sub>)<sup>S</sup>。このように幾重にも重なった価値評価の過程を簡潔に表現することができる。

本稿のねらいと概要を述べたところで、その根底にある価値づけに対するアプローチと価値判断過程の記述方法について詳しく述べることにする。

### 3 価値づけの解析

価値判断の過程を解析するためにどこから手をつけるのが適当か、それが問題である。ここでは、通常の科学的見方、すなわちアリストテレス的世界観から始めることにする。この見方によれば、世界は数えられる数の個物からなり、それらは属性を持つということである。したがって、個物Xを次のように表現することができる：

$$X = P1(X) \wedge P2(X) \wedge \cdots \wedge Pn(X)$$

なお、Piは属性を表すものとする。

さて、ここで注意しなければならないことは、Xを記述する属性を一意的に決めることが可能なのであろうかということである。この疑問に対する答えは渡辺慧の「みにくいアヒルの子の定理」にある(渡辺慧, 1978, 1986)。すなわち、この定理によれば、「二つの物件の区別がつくような、しかし、有限個の述語が与えられたとき、その二つの物件の共有する述語の数は、その二つの物件の選び方によらず一定である」というものである。言い換えると、類似性を共通する述語の数で計ることにすれば、「すべての二つの物件は同じ度合いの類似性を持っている」ということである。つまり、二羽の白鳥の類似性の度合いと、一羽の白鳥とアヒルの類似性の度合いとは同じになるということである。しかし、これは類似性を記述する属性をどれも同じ重みであると仮定し、属性の個数だけを数えたからであって、白鳥とアヒルを区別する属性に重みをつけて考えれば区別できるのである。したがって、この定理の含意は、類似性を共通する述語の数だけに着目し計った場合であることに注意してほしい。

これは何を意味するか。簡単な例で説明しよう。象と鯨とマグロがあったときに、動物学者ならば、象と鯨とが似ていると判断するであろう。両者が哺乳動物であるからだ。しかし、農水省のお役人は鯨とマグロが似ているというかもしれない。共に海に住んでいるからである。農水省のお役人にとって述語「海の中に住んでいる」の方が述語「哺乳動物である」よりも有用であるからだ。しかし、動物学者にとっては、哺乳動物であるという属性は分類をする上で重要な評価基準であろう。このように述語の有用・重要性は論理的に決まっているものではなく、人間がそれを適用するときの何らかの基準、すなわち価値基準・体系で決まるといえる。

以上を要するに、属性の記述は、意識する  
と否とにかかわらず、何らかの価値体系を前  
提にした表現であるということである。いい  
かえれば、認識というものは価値がなければ  
成り立たないということである。これが言い  
過ぎであるなら、少なくとも社会的現象につ  
いてはそういえるであろう。

### 3. 1 価値づけの視点

つぎに、属性記述における述語の選択基準  
の分析に焦点を当てよう。まず、考えられる  
のは、各述語が古典的価値分類、つまり真・  
善・美などのいずれに属し、さらに全体とし  
ていずれに属するかを分析することであろ  
う。しかし、各述語の所属あるいはまた全体  
としての所属を分析するのはあまり適当とは  
いえない。たとえば、「かれは厳格な裁判官  
であるが、個人としてはリベラルな人であ  
る」という発言があったとしよう。属性を記  
述すればつぎのようにある。

$$H = \text{Strict}(h) \wedge \text{Liberal}(h)$$

この表記は、属性（述語）StrictとLiberal  
が同じレベルで、つまり同一平面上に射影し  
たことになり、Strictが裁判官としての彼を  
その裁判における評価であり、Liberalが裁  
判官という公的立場を離れた個人としての彼  
の評価であることが表現されていない。むろ  
ん、もう少し厳密な論理表現も可能であるが  
(例えば、Fox, 2000)、個物の多面性を表現  
する必要があるということである。

ここでは、概念を三つの視点からとらえ、  
個人的、社会的あるいは社会共有、科学的・  
専門的概念に分類する。個人的概念は、ある  
個人がものごとを直感的・感覚的に捉えたも  
のであり、他と比較の上で捉えられたもので  
はない。社会的あるいは共有概念は、個々の  
ものごとに社会的あるいは通念として共有さ  
れた概念である。科学的・専門的概念は、も  
のごとを客観的・学問的考察によって確立さ  
れた概念である。

他方、同じ個物でも認識者によってそのと  
らえ方がさまざまに異なることは日頃よく経  
験するところであるが、同時に経験的事実を  
とおして認識を共通にすることもまた事実で  
ある。この点を哲学的議論でたびたび引き合  
いに出される「痛み」に関する三つの言明を  
用いて説明しよう。

(5) 僕は頭が痛い。

(6) ぶつかったので、ふたりとも頭が痛いん  
だ。

(7) これは筋肉の疲労から来る痛みです。

(5) は本人だけが感じる痛みで、意地悪く  
考えれば誰にもわからないし、嘘を言ってい  
るのかもしれない。(6) は二人が同じ経験を  
したことでお互いに相手の痛みを想像できる  
経験を共有しているといえる。(7) は医者が行  
う医学的診断であり、経験科学的判断である。

以上を踏まえ、対象をとらえる視点を三つ  
に分類する。他人の視点、経験科学的事実な  
どを意識することなく、感覚的・直感的にも  
のごとをとらえる視点を個人的視点といい、  
そのようにとらえられたものごとの属性を個  
人的あるいは固有価値という。これは、ある  
人がはじめて見聞きしたものごとに対して抱  
く体験の記述と考えてよい。個人的視点では  
何ものにも替えがたいという意味で「唯一性  
(ユニークであること)」が価値の源である。

ものごとを他の事実やものごとの共通性を  
考慮してとらえることを社会的視点といい、  
その観点からとらえられたものごとの属性を  
社会価値という。これは、他と比較可能を前  
提としており、その共通属性が必ずしも明確  
に規定されるわけではない。たとえば、「家具」  
をとりあげたとき、応接セットをその中  
に入れることに異存はないであろうが、ラン  
プを家具に入れるかは人によって異なるかも  
しれない。つまり、応接セットは家具として  
の典型的属性を有しているが、ランプは充分  
にその属性を有していないということである

(レイコフ, 1987=1993). したがって, 共有価値はさまざまな観点から比較可能であり, その価値を一般に「よいこと」で代表する.

社会的にとらえられたものごとをさらに経験科学的視点から整理されたものごとを科学的・専門的視点, その属性を科学的・専門的価値という. この観点では満たすべき属性が一般に明確に定義される. たとえば, 円, 四角などは数学的に定義される. したがって, 科学的・専門的価値ではこれを満たすことが必要であり, 定義を満たすこと, すなわち「完全であること」が価値の源泉である.

価値づけ(価値判断)の視点から三つの価値を述べてきたが, 事実—観察されたことどもとする—と価値の観点からみれば, 三つが完全に独立というわけではない. すなわち, 社会的価値は, 科学的・専門的価値に対する低レベルの事実(一回限りの観察)であり, 逆に科学的・専門的価値は, 個人的価値に対する高いレベルの価値である. これは, 一回限りの観察から一気に科学的概念にまで認識された価値である. たとえば, 真偽のほどは別にして, ニュートンがりんごの落ちるのを見て, 万有引力の法則を発見したことなどで

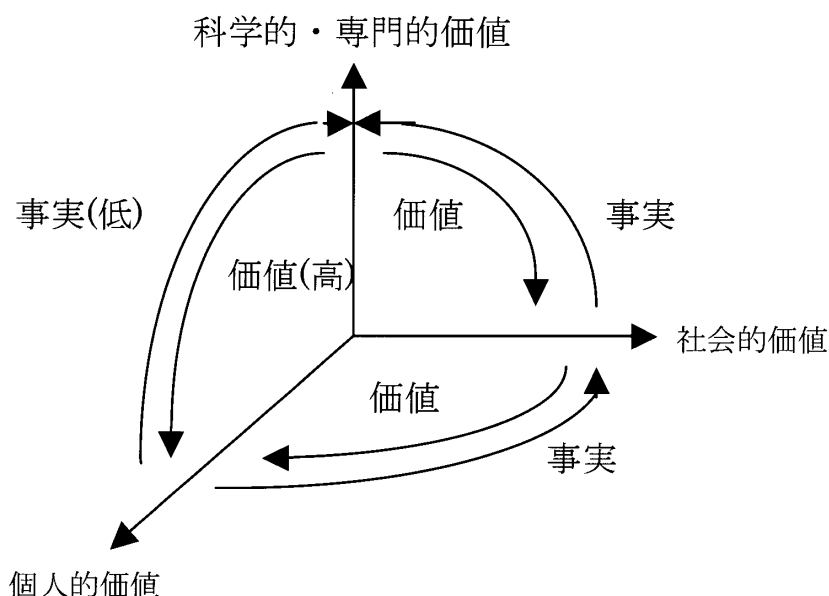
ある. 個人的価値は社会的価値に対する事実, 多くの人が共有している事実を一個人が体験したのであり, 社会的価値は個人的価値に対する価値, つまり, 多数の人が共有する価値である. 社会的価値は科学的・専門的価値に対する事実, 実際に経験・観察されたことがらであり, 科学的・専門的価値は社会的価値に対する価値であり, 経験・観察事項の本質的事項の記述である. 以上の関係を図1に示す.

### 3. 2 三分法価値づけの意義

やや横道にそれるが, 上で指摘した三分法による価値解析の方法の有効性を示すために開発か自然保護をめぐる争われるいわゆる自然保護の問題をとりあげる.

開発計画がもちあがり, その是非について討論するとき, 保護を主張する側は, その自然を守る論理が必要になる. そこでしばしば用いられてきた論理はモノの価値である. 開発に伴う経済的価値に対抗するモノの価値は, しばしば「学術的価値」といわれる. たとえば, 万博の開催予定地にオオタカの営巣が認められれば, それが開発推進反対の根拠

図1 三つの価値の関係



となる。では、そのような「学術的価値」がない場合、どのような論理を構築できるのか？ そのようなものがなければ、開発か保護かという論争は、経済的価値の勝利に終わることになる。実際、こうして「学術的価値」のない、いわゆる日本の「里山」風景は失われていった（桑子敏雄，1999，205-206）。

ここで用いられている論理はつぎのような二分法による議論である。すなわち、開発対保護が、まず経済的価値対学術的価値に読み替えられ、その裏づけとして、シンクタンク等による経済効果試算と動植物などの学術調査結果が比較されるのである。上で指摘した価値づけで表現するなら、社会的共有価値である経済的価値と科学的・専門的価値である「学術的価値」だけが問題とされている。この議論には、当該対象が有する固有の価値は全くあるいはほとんど考慮されていない。これでは、ごく身の回りに存在する「学術的価値」のない自然を守る論理は到底でてくるはずがない。

ここで思い出されるのは、南方熊楠の環境観である。大字ごとに祀られてきた存立基盤の弱い産土社を廃止して、一町一村に合祀しようとする明治政府に反対する「神社合併反対意見」を明治45年の『日本及日本人』に発表した。大略、以下のとおりである（南方熊楠，1970）。

神社の神林は、益鳥の保護繁殖、砂防、水源涵養や、失火、地震などの非常のときに役立ち、村民にとって財産となるばかりでない。参詣人に飲食を売り、祭典の旗幟染などといった手仕事の商品化される場でもある。生態系の安定と国土保全、そして生産と経済生活に資するところが大きい。かつまた、村民自治の円滑な運営をうながし、慰安を提供しながら人情と愛郷心を養うというかたちで民心を安定させる。これがまた神社を維持し、したがって土地の防災と生態系の安定を可能にする。さらに、外から見れば、『大字

毎の神社は、欧米の高塔と同じく、村落の目標となる大功あり』を引用し、また内から見はらして、『大字中眺望最佳の地にあれば、宗教心と風流を養ふのに一挙兩得なり、滅却し去るべからず』と論じている。

ここには、産土社がもつ社会的・経済的価値だけでなく、「大字の神社は、大いに社交を助け、祭日には用談も方つき、<sup>かた</sup>鹿<sup>もえん</sup>縁なりし輩も和睦したること、例乏しからず。また毎宵青年が順番に建燈に趣く等の良風もありたり」と述べ、そこで生活する人々にとっての意義が強調されているが、これは上で指摘した固有的視点からの価値づけである。

環境・公害問題など、価値観をめぐる争われる問題では、数量化が行いやすい科学的・専門的価値、あるいはまた他との比較が容易な社会的共有価値を中心に論じられることが少なくないが、ここで指摘したように、これらに加えて当該対象の固有価値に注目することが多様な価値判断には欠かせないのである。

#### 4 価値判断過程の記述方法

上述の価値に対する観点から、価値づけおよび価値評価過程を記述するため、対象の属性記述をつぎのように表現する：

$$(8) X = \bigwedge_{i=1}^l Si \wedge \bigwedge_{j=1}^m Ej \wedge \bigwedge_{k=1}^n Ik$$

ただし、 $\bigwedge Si$  は対象  $X$  についての科学的・専門的属性（言い換えれば、定義的規定）、 $\bigwedge Ej$  は対象  $X$  の認識に関し認識者による共有属性、 $\bigwedge Ik$  は認識者が付与する独自の属性あるいはその程度である。

対象  $X$  を記述する (8) は対象により、あるいは同一対象を記述する人により異なる。この論理表現では属性間の関係は必ずしも明らかではなく、比較もし難いのでこれを束構造として図式化する。その方法はよく知られている（例えば、Ganter and Wille, 1999）。

##### 4. 1 属性表現の束構造図

例によってその方法を説明しよう。まず、

最も簡単な例として、ものと属性記述が与えられたとき、すなわち定義的規定が与えられたときをとりあげる。この場合、ものと属性の関係は表1のように表すことができる。この表を満たす属性の組み合わせに応じて図2に変換することができる<sup>(3)</sup>。

図2のいくつかのノードは表1の対象を表現しているが、残りのノードはここでは対応する対象をもっていない。しかし、ここで注目したいことは、これらのノードはそのよう

な属性を有する対象が存在する可能性を示していることである。

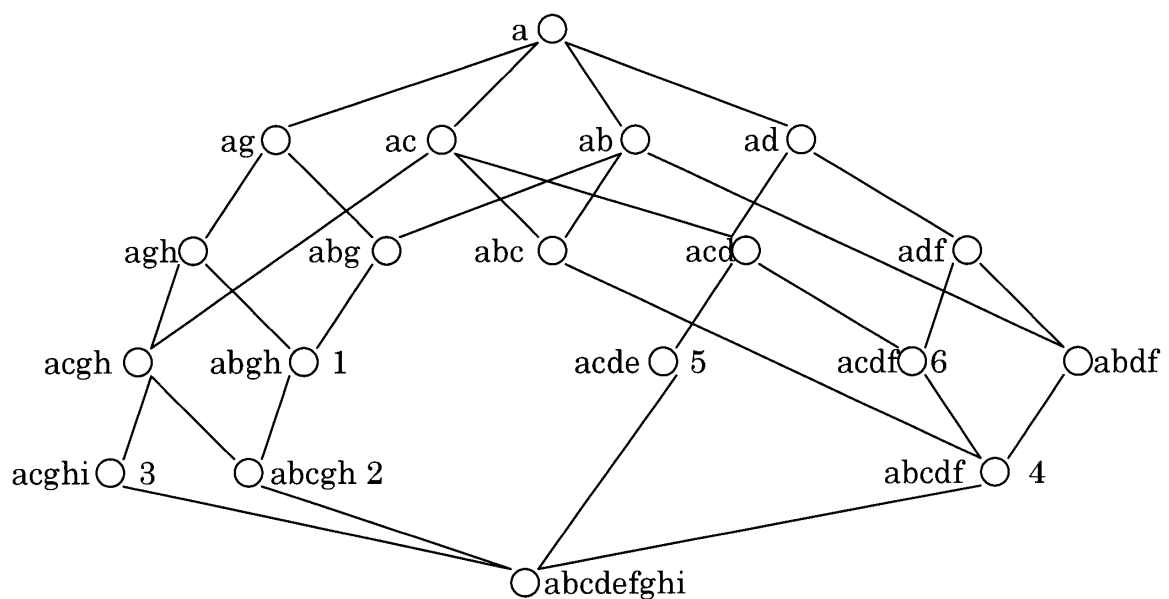
図2に示すように、Hasse図の各要素（ノード）は属性を有する個数によって順序づけられている。図上で上位に位置するノードは満足する属性が少ないことを表している。一番上の要素は一つの属性しか満足しないこと、一番下位のノードはすべての属性を満たすことを表現している。言い換えれば、この図は属性の論理積の可能な組み合わせを表現して

表1 生物の属性

		a	b	c	d	e	f	g	h	i
1	鯛	×	×					×	×	
2	蛙	×	×	×				×	×	
3	犬	×		×				×	×	×
4	葦	×	×	×	×		×			
5	豆	×		×	×	×				
6	とうもろこし	×		×	×		×			

属性 a：水を必要とする，b：水の中で生活する，c：陸上で生活する，d：葉緑素がある，e：双子葉，f：単子葉，g：動きまわる，h：脚・鱗がある，i：子を乳で育てる

図2 生物の属性図





いる。

#### 4. 2 複数個の属性値

表1の属性はいわゆる属性値をひとつしかとらないものであった。価値判断においては一般に属性に対するいくつかの評価値をとることが少なくない。ここでは簡単のために「非常によい／よい／普通／わるい／非常に

わるい…」をとりあげる。具体的例として、表2に示す車の属性を4段階程度で比較する場合をとりあげる。「非常によい」、「非常にわるい」はそれぞれ「よい」、「わるい」を包含することに注意すれば、表3のように整理することができる。図3はこの属性値のHasse図である。

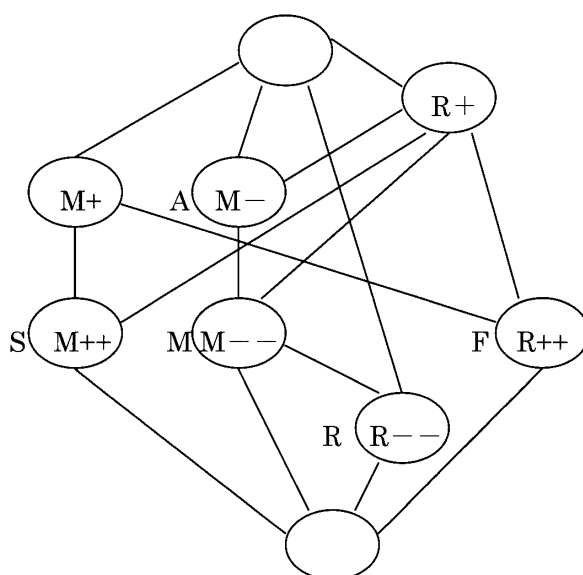
表2 車の属性

	保 守 性	走 行 安 定 性
標 準 型 車	非 常 に よ い	よ い
前 輪 駆 動 車	よ い	非 常 に よ い
後 輪 駆 動 車	非 常 に わ る い	非 常 に わ る い
ミッドエンジン	非 常 に わ る い	よ い
四 輪 駆 動 車	悪 い	よ い

表3 属性値の書換え

	保 守 性 (M)				走行安定性 (R)		
	++	+	—	--	++	+	--
標 準 型 車 (S)	×	×				×	
前 輪 駆 動 車 (F)		×			×	×	
後 輪 駆 動 車 (R)			×	×			×
ミッドエンジン (M)			×	×		×	
四 輪 駆 動 車 (A)			×			×	

図3 表3のHasse図



#### 4. 3 価値づけ（過程）の形式化

属性の論理表現を Hasse 図で表し、対象あるいは属性間の相互関係を表現する方法を示した。しかし、(8) 式をそのまま価値評価に適用することはできない。なぜなら、(8) 式は対象を記述するものであって、価値評価を含まないからである。したがって、ここで解決しなければならないことは、(8) 式に 3 節で強調した価値づけの視点を組み込み、個別の価値評価を記述するとともに、これを価値づけ過程（価値判断過程）に適用することである。

価値評価および価値評価過程を記述するために 3 節で述べたことから少なくともつぎの三つの条件を要請することにする。第一に、評価視点の独立性、すなわち対象の属性を各視点から評価し、図 1 の三次元価値空間に写像する。第二に、属性の評価加法性、すなわち対象の属性を科学的・専門的、社会的共有、個人的視点からそれぞれ評価し、その論理積のすべての組合せをとる。これによって対象の多元的評価を表す。第三に、評価視点の転換、すなわちある視点からの評価をさらに視点を変えた評価を行えるようにする。以下ではこれら三つの要請を表現する記法を導入しよう。

##### 4. 3. 1 価値づけの記法

対象  $X$  をある視点  $V$  から価値づける（評価する）ことを  $X^V$  と表記し、対象  $X$  の  $V$  からの可能な価値判断をすべて含む。この判断結果のうち、とくに肯定的評価および否定的評価はこれまでどおり  $X^V$ 、 $X_V$  で示す。価値づけ記法と肯定的評価が同じであるけれども、文脈から区別可能であろう。

以下において必要となる式の煩雑さを避けるため、(8) 式をつぎのように書き換える。

$$X = S \wedge E \wedge I$$

ただし、 $S$ 、 $E$ 、 $I$  はそれぞれつぎの論理式である。

$$S = \bigwedge_{i=1}^l S_i, E = \bigwedge_{j=1}^m E_j, I = \bigwedge_{k=1}^n I_k$$

価値づけの考察では、属性のどこをどの見地から価値判断しているのかを明示する必要がある。そのために必要な用語を定義する。対象  $X$  の  $S$ 、 $E$ 、 $I$  それぞれを対象の側面、あるいは単に側面といい、三つの視点、すなわち科学的・専門的視点 ( $S$ )、社会共有的視点 ( $E$ ) および個人的視点 ( $I$ ) それぞれを単に視点と呼ぶことにする。

##### 4. 3. 2 視点の独立性：価値空間への写像

対象  $X$  を三つの視点から評価することは、三次元価値空間への写像と考えられるから、つぎのように定義する。

$$X^{S+E+I} =_{\text{def}} (X^S, X^E, X^I)$$

なお、対象の一部の側面を捨象（無視）し評価した場合、捨象した座標を 1 で表す。たとえば、対象の側面  $I$  の視点  $S$  からの価値評価を  $I^S$  で表し、つぎの略記とみなす。しかし、混乱のない限り、三次元空間で考える必要はない。

$$I^S = (I^S, 1, 1)$$

1 はその視点から価値判断をしていないこと、あるいはその視点からは単なる属性記述とみなしていることを意味する。

##### 4. 3. 3 属性評価の乗法性：多元的評価

対象  $X (= S \wedge E \wedge I)$  をそれぞれの視点から評価した結果は、各側面をそれぞれの視点から評価した結果をつぎのように定義する。

$$X^S = (S \wedge E \wedge I)^S =_{\text{def}} S^S \cdot E^S \cdot I^S$$

$$X^E = (S \wedge E \wedge I)^E =_{\text{def}} S^E \cdot E^E \cdot I^E$$

$$X^I = (S \wedge E \wedge I)^I =_{\text{def}} S^I \cdot E^I \cdot I^I$$

ここで、右辺の  $\cdot$  演算はつぎの集合を表すものとする。

$$S^S \cdot E^S \cdot I^S =_{\text{def}} \bigcup_{i,j,k} \{S_i^S \wedge E_j^S \wedge I_k^S\}$$

$$S^E \cdot E^E \cdot I^E =_{\text{def}} \bigcup_{i,j,k} \{S_i^E \wedge E_j^E \wedge I_k^E\}$$

$$S^I \cdot E^I \cdot I^I =_{\text{def}} \bigcup_{i,j,k} \{S_i^I \wedge E_j^I \wedge I_k^I\}$$

要するに、属性の各側面を視点から評価した結果の可能なすべての論理積を元とする集合を意味する。これによって評価の多元性を表現することができる。

この定義から  $X^{S+E+I} = (X^S, X^E, X^I)$  はつぎのように展開される。

$$\begin{aligned} X^{S+E+I} &= (X^S, X^E, X^I) \\ &= ((S \wedge E \wedge I)^S, (S \wedge E \wedge I)^E, \\ &\quad (S \wedge E \wedge I)^I) \\ &= (S^S \cdot E^S \cdot I^S, S^E \cdot E^E \cdot I^E, \\ &\quad S^I \cdot E^I \cdot I^I) \end{aligned}$$

一方、各側面から先に評価すると

$$\begin{aligned} X^{S+E+I} &= (S \wedge E \wedge I)^{S+E+I} \\ &= S^{S+E+I} \cdot E^{S+E+I} \cdot I^{S+E+I} \\ &= (S^S, S^E, S^I) \cdot (E^S, E^E, E^I) \cdot \\ &\quad (I^S, I^E, I^I) \end{aligned}$$

となる。これが上の結果と一致するために価値空間の点の積・を導入する必要がある、これをつぎのように定義する。

$$\begin{aligned} (X, Y, Z) \cdot (X^1, Y^1, Z^1) &=_{\text{def}} \\ (X \cdot X^1, Y \cdot Y^1, Z \cdot Z^1) \end{aligned}$$

すなわち、同一視点の要素の論理積をとる、言い換えれば、視点が異なる価値づけの論理積は許さないということである。

以上の視点独立性、属性評価の乗法性を用いると、つぎのような状況を簡潔に表記することができる。ある人が毎週日曜日ゴルフをする ( $I$ ) としよう。これについて当人、家族、友人それぞれがつぎのように判断している。当の本人は趣味としてゴルフを楽しみ ( $I^I$ )、健康にもよい ( $I^S$ ) と思っている。一方、家族はゴルフもほどほどにし、少しは家族サービスをして欲しいと思っている ( $I^E$ )。さらに、日本のゴルフ場が環境に及ぼす影響を心配している友人はそんなスポーツをすることをころよく思っていない ( $E^E$ )。以上の4つの価値評価をつぎのように記述することができる。

$$\begin{aligned} X &= E \wedge I \\ X^{S+E+I} &= (E \wedge I)^{S+E+I} = ((E \wedge I)^S, \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} (E \wedge I)^E, (E \wedge I)^I) &= (1 \cdot I^S, E^E \cdot \\ &\quad I^E, 1 \cdot I^I) \\ &= (I^S, E^E \cdot I^E, I^I) \end{aligned}$$

各次元が同一視点からの価値づけになっていることがわかる。

#### 4. 3. 4 評価視点の移動：価値づけの転換

対象  $X$  をある視点  $V$  から評価した結果を異なる視点  $V^1$  から改めて評価する操作をつぎのように表す。

$$\begin{aligned} (X^V)^{V^1} &= ((S \wedge E \wedge I)^V)^{V^1} = (S^V \cdot E^V \cdot \\ &\quad I^V)^{V^1} = (S^V)^{V^1} \cdot (E^V)^{V^1} \cdot (I^V)^{V^1} \end{aligned}$$

具体的には、対象  $X$  のある側面 ( $S$ ,  $E$ ,  $I$  のいずれか) を取り出し、視点  $S$ ,  $E$ ,  $I$  からの評価をそれぞれ、 $S^S$ ,  $E^S$ ,  $I^S$ ,  $S^E$ ,  $E^E$ ,  $I^E$ ,  $S^I$ ,  $E^I$ ,  $I^I$  と表記し、 $(S^S, 1, 1)$ ,  $(E^S, 1, 1)$ ,  $(I^S, 1, 1)$ ,  $(1, S^E, 1)$ ,  $(1, E^E, 1)$ ,  $(1, I^E, 1)$ ,  $(1, 1, S^I)$ ,  $(1, 1, E^I)$ ,  $(1, 1, I^I)$  を意味する。たとえば、密造酒を造ること ( $E$ ) を楽しむ ( $E^I$ ) のは法的に許されない ( $E^I$ )<sub>s</sub> は  $(1, 1, E^I)$  から  $((E^I)_s, 1, 1)$  へ視点を変えた判断であり、三次元価値空間でいえば、評価軸の移動である。

#### 4. 3. 5 価値づけと Hasse 図

上で導入した価値づけも Hasse 図で表すことができる。まず、具体例を示し、その後一般的方法を示す。

(9) ジョンは (裁判官として) 厳格な裁判官だが、(個人として) リベラルな人だ。

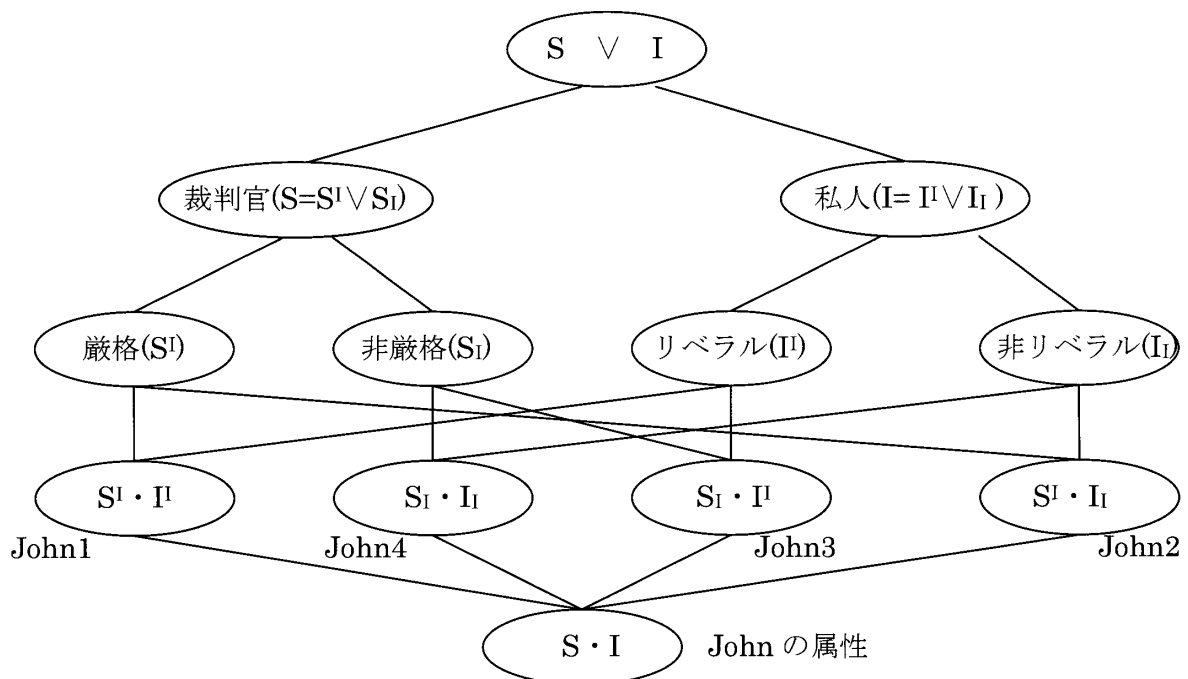
これを、ジョンを裁判官という厳密に定義された対象 ( $S$ ) を個人的立場 ( $I$ ) から、厳格だと判断し、一私人として ( $I$ ) みれば、個人的立場 ( $I$ ) リベラルだと判断していると考えて不自然ではないであろう。形式的に書けばつぎのとおりである。

$$\text{John} = S \wedge I$$

表 4 (9) の属性表現

		John の 属 性			
		裁 判 官 (S)		私 人 (I)	
		厳 格 (S <sup>1</sup> )	非厳格 (S <sub>1</sub> )	リベラル(I <sup>1</sup> )	非リベラル(I <sub>1</sub> )
John	1	×		×	
John	2	×			×
John	3		×	×	
John	4		×		×

図 4 (9) の Hasse 図



$John^1 = (S \wedge I)^1 = S^1 \cdot I^1$   
 厳格である( $S^1$ )およびリベラルである( $I^1$ )という価値づけに関し、その結果を肯定的( $S^1$ )および否定的評価( $S_1$ )に限れば、それぞれ $S^1 = \{S^1, S_1\}$ ,  $I^1 = \{I^1, I_1\}$ であるから、

$$= \{S^1, S_1\} \cdot \{I^1, I_1\} = \{S^1 \cdot I^1, S^1 \cdot I_1, S_1 \cdot I^1, S_1 \cdot I_1\}$$

Hasse 図に描くためにこの価値づけを“属性”とみなし整理すれば表 4 になる。

図 4 は表 4 の Hasse 図である。図 4 の最上位のノードはここではジョンに対する視点であり、最下位のノードは判断から自由な

ジョンの属性 ( $= \lambda PP(I)$ , もしあるとして) である。それは、最下位のノードが図 4 からわかるようにすべての属性の積表現であり、また  $X^v \cdot X_v =_{\text{def}} X^v \cdot X^{-v} = X^{v-v} = X^0 = 1$  を適用して得られる。つまり、ここで価値づけの対象になっている S かつ I としてのジョンである。

$$S \cdot S^1 \cdot S_1 \cdot I \cdot I^1 \cdot I_1 = S \cdot 1 \cdot I \cdot 1 = S \cdot I$$

表 4, 図 4 は、発話 (9) における話者が背後に抱いている価値づけの可能性を示している。二つの評価（ここでは属性と呼んでいるが）の間を「だが」で接続しているのは、

「リベラル」と「厳格」とが評価として対立関係にあることを暗に仮定していることを示す。しかし、話者が「厳格」を肯定的にとらえ、「リベラル」を否定的に考えている、あるいはその逆であるかはこの発話だけから断定することはできない。つまり、裁判では厳格な判断を下すくせに、政治的にはリベラルでいい加減な野郎だと言っているのか、裁判では法に忠実に解釈するひとだが、政治的判断等では柔軟な態度を示すと言っているかは判断できない。

(9) では価値づけ視点がひとつに限定されていたが、ここで展開している最も一般的なつぎの価値づけ結果を Hasse 図で描くことも可能である。

$$X^{S+E+I} = (S^S \cdot E^S \cdot I^S, S^E \cdot E^E \cdot I^E, S^I \cdot E^I \cdot I^I)$$

各次元については上で述べた方法が適用できるので、問題は各次元の要素をどのように扱うかである。ここでは、評価視点の独立性を仮定したので、各次元の要素を論理和で表すことができる。すなわち、

$$X^{S+E+I} = S^S \cdot E^S \cdot I^S \vee S^E \cdot E^E \cdot I^E \vee S^I \cdot E^I \cdot I^I$$

これを Hasse 図に描くには、論理和の各項を部分 Hasse 図として含み、各部分 Hasse

図の最上位のノードを結合し、新たな最上位のノードを作ればよい。最下位のノードについても同様に描くことができる。これが  $S^S \cdot E^S \cdot I^S \cdot S^E \cdot E^E \cdot I^E \cdot S^I \cdot E^I \cdot I^I$  である。概略は図 5 のようになる。

さらに、 $(X^{V1})^{V2}$  も Hasse 図による属性記述の中で扱うことができる。すなわち、内側の評価の Hasse 図の各ノードを視点  $V1$  から肯定的、否定的に評価したノードに変更したものを二つ作り、これらを最上位のノードを結合し、新たなノードを追加する。最下位のノードを結合し、新たな最下位のノードを追加する。これだけである。具体例として  $E^E$  から  $(E^E)^I$  の Hasse 図を描く方法を図 6 に示す。

本節では、判断過程を記述する方法を述べた。その要点を摘記する。

- 1) 対象  $X$  の属性表現を Hasse 図、すなわち、束構造として表現した。
- 2) 複数の属性値をとる属性を Hasse 図で表す方法を示した。
- 3) 三つの視点に基づく対象の価値づけおよび価値評価過程を記述する方法を提示し、価値判断過程が簡潔に記述可能であることを示した。

図 5  $X^{S+E+I}$  の Hasse 図

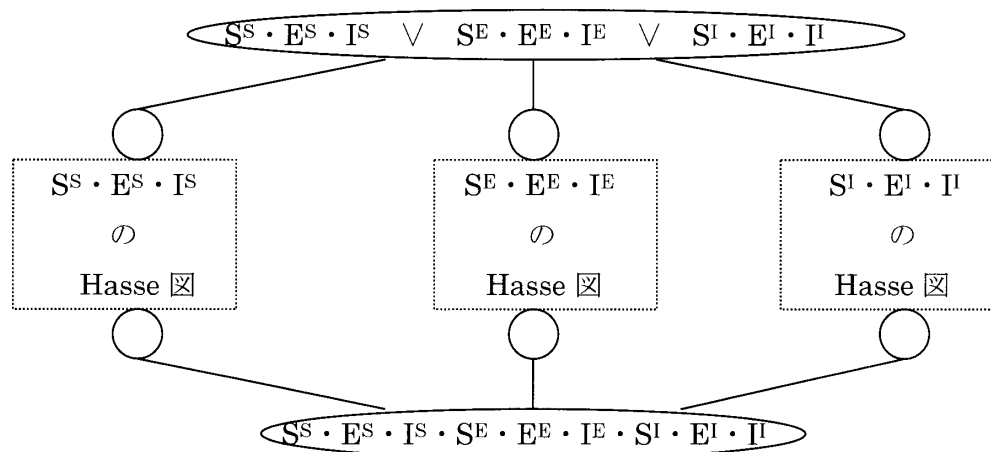
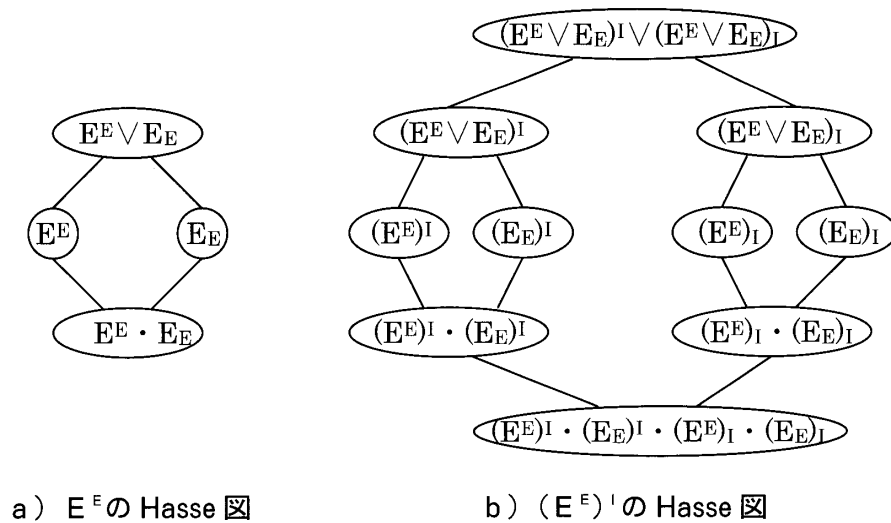


図6  $E^E$ から $(E^E)^I$ のHasse図作成

4) 価値づけおよびその過程をHasse図で表現できることを示した。

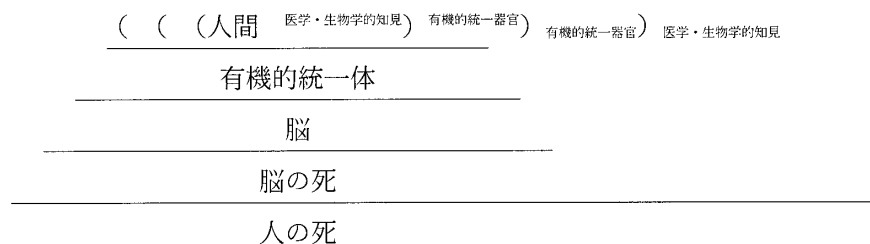
## 5 記述例と考察

ここで述べた価値判断過程の解析と記述方法を实际的・具体的表現に適用しその有効性を示すとともに、レトリックによる分析、事実に（説明的）分析などに比しいかなる特徴を有するかを考察する。

### 5.1 脳死論議の記述

2節で取りあげた脳死臨調の多数・少数意見の対立を少数意見側からの批判にもとづいて価値判断過程を解析する。少数意見の立場から解析を試みるのは、やや公平を欠くが判断過程とその記述が主目的なので、諒とされたい。

少数意見側は、多数意見が「次のような論理構造をもっていると言って差し支えないであろう」という。すなわち、



「死は医学的、生物学的なものであるが、同時に哲学的、宗教的なものでもある。しかし、死の決定においてやはり医学、生物学的知見によれば、「脳死」を「人の死」と認めざるを得ない。なぜなら、最近の医学、生物学的な知見によれば、人間は有機的統一体と理解されべきであるが、その有機的統一を司る器官は脳である、それゆえに脳の死は有機的統一の喪失であり、したがって「脳死」は「人の死」である。」

価値判断過程の解析を文章の分析に適用する万能の方法はない。文章を読み、価値づけの転換に注目することが肝要である。もちろん方法の精粗はある。ここでは、「なぜなら」以降が死の定義の根拠づけである。この部分を細かく解析すると、以下ようになる。下線部の下に価値づけによって導かれたものを示す。

このように解析すると、第1文の死が「哲学・宗教的なものである」という部分は文飾に過ぎず、第2文の「しかし」以降が主張であり、有機的統一体による根拠づけを行っていることが一層明瞭になる。

上記のようにとらえられた多数意見に対する少数意見の反論を解析し、その差異を比較しよう。

「多数意見は、「脳死」は「人の死」であることを論証する根拠として、生命は有機的統一体であるという説を用いるが、それは決して医学的見解ではない。おそらくこの見解は、アメリカ大統領委員会において用いられた概念を転用したものであろうが、大統領委員会においてもそれは、「脳死」が「人の死」であることを論証するために用いられた一哲学的見解にすぎないのである。（中略—引用者）仮に有機的統一体論を認めたとしても、「脳死」が死であるということを論証することはできない。なぜなら、生命は全体として有機的統一体なのか、それとも部分において有機的統一を司る器官があるのかどうか、それがあるとしたら、それは脳であるか心臓であるかは一概に決定できない問題である。多数意見は、何の論証もなく生命を有機的統一体として、しかも統一を司る器官を脳として、それでもって「脳死」は死であると断定するが、そこには幾重かの論理の飛躍があり、とても多くの人を納得せしめるものではない。」

反論の判断過程を解析するために、多数意見の判断構造を再掲する。

((((人間<sup>医学・生物学的知見</sup>) 有機的統一器官) 有機的統一器官)

医学・生物学的知見

まず、少数意見は、多数意見が依拠する有機的統一体という視点は医学的見解ではなく、一哲学的見解にすぎないと断定することによって、医学・生物学的知見からの判断で

ないことと主張する。ついで、仮に有機的統一体だとしても、その有機的統一器官が脳であるかは決定できない問題であると指定する。だから、脳死から直ちに人の死を導くことはできないと結論づける。

当然といえば当然であるが、以上の議論が多数意見の価値づけを逆転させる判断過程になっていることに改めて驚かされる。このように、ここで提案した方法は価値判断過程における価値づけの視点・立場とその変転過程を鮮明にすることができる。

## 5. 2 レトリック分析との比較

レトリックの手法として重要な役割を果たす比喩は、ここで考察している価値づけの観点からいえば、個人的価値づけと社会的価値づけの間の転換を行う手段として捉えることができる。具体事例として、やや長いが次の文章をとりあげる。

「物の中にはそれを造った人の心、それを所有し、使用してゐる人の心が生きてゐる。譬へば、親にとって死児の遺品は決して単なる物とは言へない。自分の子供が愛玩してゐたおもちゃは、遺された親にとって、子供の心と自分の心とがそこで出会ふ場であり通ひ路なのであり、随って、それは心の棲家なのであります。自分自身の所有品についても、自分が長年の間使つて来た、詰り附合つて来た品物は事のほか愛着を覚え、吾々はそれを単なる物として見過ごす事は出来ないのです。消しゴムや小刀の様な瑣末なものですら、そしてそれがもう使ふに堪えなくなったものでも、むげに捨て去る気にはなかなか成れないものです。この「こだはり」を「けち」と混同してはなりません。それはその物の中に籠められてゐる自分の過去の生活を惜しむ気持ちであつて、吾々はその物を捨て去る事によって自分の肉体の一部が傷付けられ切落とされる痛みを感じるのあります。

ましてその物が、自分が生まれた時から暮して来た家、子供の頃に登った柿の木、周囲の山や川、さういふものともなれば、なほさら強い愛着を感じ、自分の肉体の一部どころか、時にはそれが自分の命そのものに等しい感じを懐くのであって、それを私達は「命よりも大事な」とか「命の次に大切な」といふ言葉で表現してゐるのです。さうした自然、風物、建物に対する愛情が愛郷心、愛国心の根幹を成すものではないでせうか。」(福田つね存「物を惜しむ心」)

野内(2003)は、上の文章をレトリックの観点からつぎのように分析する、すなわち「上の文章は人間と物の間に結ばれる「換喩」的關係への注目が出発点にある。そして次いで、日常的な身の回りの品への関係と、自然的=人工的=文化的環境(自然・風物・建築)との関係の比較へと進む。物に対する愛着と環境に対する愛着。普段は結びつけて考えられることのない2つのものの間に「類似性」が発見される。いわゆる「類比推理」である。さらに、理由づけ(論拠)は、「同じようなもの」を例示することによって人を説得する議論、例示一論証に訴えている。」

レトリックによる分析と比較するため、上の文章を粗い方法で解析する。前段冒頭文から日常的な身の回りの物に対する愛着心を肯定的に捉えていることが読み取られる。日常的な身の回りのものは、他の人にとっても一般にそうであるから、社会的対象と考えるのが適当である。したがって、これをEで表す。物に対する愛着心は、他の人も所有しているであろうがその内実はひとそれぞれに異なると考えるのが妥当であり、その視点から肯定的に価値づけている。したがって、ここで述べられている、日常的な身の回りの物に対する愛着心を

E<sup>1</sup>

と表現することができる。

前段第2文以降は、他の人も有するであろ

う愛着心に訴えており、いっけん社会的観点から価値づけしているように思われかねないが、書き手はどこまでも人が愛着心をもつことだけを強調したいのであって、それぞれの愛着心の相違に関心があるわけでもなく、またその必要もないのである。その意味で書き手の個人的視点なのである。逆にいえば、個人的視点からの新鮮な指摘であるから、効果的な比喩なのであり、レトリックの分析対象として興味深いのである。したがって、ここでは前段全体を上のように表現するだけで価値判断過程の記述には充分である。

後段は、レトリック的にいえば、冒頭の「まして」が示すようにいわゆる「なおさら一論証」によって、愛着心を一気に「愛郷心、愛国心」にまで転換することを意図している。価値判断過程の解析には最後の文「さうした自然、風物、建物に対する愛情が愛郷心、愛国心の根幹を成すものではないでせうか。」に注目するだけでよい。

問題はこの一文だけから愛郷心・愛国心をどの次元から価値づけしているかが判然としないことである。行論からいえば、私的経験である物に対する愛着心を土台に社会的愛郷心、愛国心を肯定的に主張することは明らかである。なぜなら個人的レベルで愛国心を論ずるのであれば、何もこのような「換喩」による論法を駆使する必要もないからだ。したがって、最終的に価値判断過程は次のようになる：

(10) (E<sup>1</sup>)<sup>E</sup>

この表現を端的にいいかえると、身の回りの物に対する愛着心を個人的に価値づけ、それを社会的に評価し、結果として愛国心を肯定的に捉えているということである。引用した文章には種々の比喩、説明があるが、価値判断の過程として捉えれば、上記の要約に尽きる。このような粗い解析でも、価値判断過程における価値づけの変化、いいかえれば、その動的構造を炙り出すことができるのである。



さて、以上のように価値判断過程を解析しておけば、反論を構成することも比較的容易である。上の文章への反論を試みよう。既に見たように、その価値判断過程は(10)であった。個人的な愛着心が個々人に属するものであり、それを個人的観点から評価することに反論することはできにくいと推測するので、 $E^1$ の部分に立入ることは適当ではないであろう。したがって、(10)に反論するとすれば、つぎのものが考えられる：

$(E^1)_E$    あるいは    $(E^1)_S$

両者ともに個人的な愛着心の価値付けから一足飛びに愛国心につなげられないことを意味し、つながらない理由づけをそれぞれ社会的視点、科学的・専門的視点から展開すべきであることを表している。要するに、愛着心と愛国心を同列に論じられないことを説得的に根拠づけなければならないということである。

### 5. 3 価値解析と事実・歴史的解析の比較

価値判断過程の解析が事実や歴史的解析と如何に異なるかを示すために R.S. Hartman から一例を引く。解析対象はプラトンの『エウチュプロン』冒頭の部分である。

**エウチュプロン** ①一体どうなさったのです、ソクラテス。あなたがリュケイオンでの研究<sup>(4)</sup>を捨て、②いまごろ皇帝の役所の付近を歩きまわっておられるなんて、③あなたもわたしのよう、とうとうバシレウスのところへ訴訟をもちこまれたのですか。」(グアルディーニ、1952=1968)

このパラグラフをつぎのように解説することが可能である。すなわち、ソクラテスは、アテナイ郊外にあった三つの大きな体育所の一つであるリュケイオンで人々と哲学的議論をするのを習慣としていた。バシレウスは元来、王を意味する言葉であるが、当時はただの役名であり、神事に関する仕事はこの役名の人の司るところとなっていた。したがって、流神に関する訴訟業務もこの役の管轄下

にあった。エウチュプロンは流神の罪でその父親をバシレウスに訴えて、その役所から出てくるところで、たまたまソクラテスにいたのである。ここに来るのは通常誰かを公訴するためである。ソクラテスが誰かを訴えるとはとても考えられないから、エウチュプロンは驚いているのである。このような解説を事実的・歴史的解析と呼ぶことができる。

これに対し、価値判断過程の解析はこのパラグラフに含まれる価値づけの対象と価値づけの視点を明らかにすることである。Hartman はこのパラグラフを 53 個の価値づけ対象と 22 個の価値付けとして解析する。すべてを解析することは煩雑であり、またその必要もないので 4 節で示した方法に基づき、①部分の価値判断の過程を解析しよう。

①にはつぎの価値づけ対象が含まれる。すなわち、ソクラテスがリュケイオンで行う議論 (I)、エウチュプロンにとっての社会的娯楽 (E)、ソクラテスの哲学的議論 (I)、真理の探求 (S)、ソクラテスの議論 (I)、ソクラテスの生活スタイル (E)、ソクラテスおよび同朋の時間を無駄にすること (E) である。これらをエウチュプロンは 10 ほどの観点から価値づけする。社会的楽しみ (E)、単なる娯楽 (E)、時間の無駄 (S)、社会的価値 (E)、社会的無益 (E)、無益 (S)、社会的気晴らし (E)、アテナイ人として (E)、会話すること (S) などである。その結果を表 6 に示す。この表から価値判断過程の解析が事実的・歴史的説明に基づきながら、そこに含まれている対象をどのように評価、価値付けしているかを炙り出すものであることが見てとれよう。

## 6 おわりに

ここで述べた価値判断過程の記述は、著者らがこれまで進めてきた社会情報解析の延長上に位置する(大國充彦他、1999;長田博

表6 『エウチュプロン』の価値解析

	a	b	c	d	e				f	
	社会的 楽しみ (E)	単なる 暇つぶ し (E)	時間の 無 駄 (S)	時間の 無 駄 (S)	社会的 評 価 (E)	無駄な 議 論 (S)	無駄な 議 論 (S)	社会的 暇つぶ し (E)	アテネ 社会か ら (E)	対話の 評 価 (S)
ソクラテスが 哲学すること(I)	I <sup>E</sup>	I <sup>E</sup>								
ソクラテスの 楽 し み (E)			E <sub>s</sub>							
ソクラテスの 天 職 (I)				I <sub>s</sub>						
真理の体系化 (S)					S <sup>E</sup>					
ソクラテスの 議 論 (I)						I <sub>s</sub>				
真 理 探 究 (S)							S <sub>s</sub>			
真 理 探 究 の 議 論 (S)								S <sup>E</sup>		
ソクラテスの 生活スタイル(E)									E <sub>E</sub>	
ソクラテス、 人々の時間(E)										E <sub>s</sub>

泰, 2001, 2002, 2003). これまで価値情報過程を論理的・言語的分析によって静的に考察してきたが, 本稿では次のアプローチによって価値判断過程の中に含まれる価値づけの基本構造とその記述方法を提示し, その有効性を示した.

- 1) 価値づけの次元として三つの独立した視点を立てる, すなわち, 個人的, 社会的, 科学的・専門的の三つの次元である,
- 2) 価値判断過程をこれら三つの次元における価値付与(評価する)および価値否定(評価しない)の組み合わせとして記述する.

ここで採用した三つの次元からものごとを

とらえ, 考察することは日頃誰でも行っていることであり, こと改めて主張することにそれほど意味があるのか戸惑いを覚える. 恐らく, その理由は, 価値とは何か, つまり哲学的に考察することはあっても(例えば, 神川正彦, 2000), その具体的表現形態である価値判断過程の記述, あるいは, 価値(過程)をいかに記述するかという視点からの研究が行われて来なかったためと思われる.

方法はいまだその緒についたばかりであり, 具体的な社会的議論, 社会的政策等をめぐる議論に適用し, 三つの価値視点とその形式化の有効性をさらに実証することが今後の課題である.

## 注

(1) 拍動停止（心停止）、呼吸停止、瞳孔散大という三つの徴候によって死の判定をする。

(2) オルテガ（1925=1970, 48-53）は、『現象学の数滴』の中で同様な場面を同様な視点からつぎのような展開をしている。「高名な男が死にかかっている。妻がその枕もとにいる。医者が臨終間近い男の脈をとっている。部屋の奥にはさらに二人の人物がいる。一人は、職業上の理由からこの死の場面に立ち合っている新聞記者で、もう一人は偶然に来合わせた画家である。妻と医者と新聞記者と画家が、同一の事実を見守っている。しかしながら、この単一の事実——一人の男の苦悶——は、この四人の一人ひとりにそれぞれ異なった側面を提示するのである。（中略）四人の視点を最も明確に区別する方法は（中略）末期の苦悶という共通の事実と四人の間の精神的な距離を測定することである。妻の場合には、その距離は僅少であり、ほとんど存在しないといえる。（中略）医者となると、すでにやや離れた距離にいる。彼にとってこの問題は、職業上の一つのケースである。（中略）新聞記者の視点に立ってみると、（中略）その距離はあまりにも遠く、（中略）新聞記者の職務はまさに関与しないこと、つまりただ観察することだけを要求するのである。（中略）画家となると、事件には無関心で、ただじっと舞台に目をすえているだけである。」

(3) その方法の概略はつぎのとおりである。満足するものの個数が最大の属性に注目し、その外延を作る。ここでは、 $a$ であり、これを図の最上位に描く：  
属性  $a = \{\text{水を必要とする}\}$   
つぎに  $a$  と他の属性の組み合わせを作り、その包含関係を調べる。比較不能、すなわち互いに含まれていないものをノードして描

く。この場合、つぎのものが残る。

$a \wedge b = ab = \{\text{水を必要とする, 水の中で生活する}\}$

$a \wedge c = ac = \{\text{水を必要とする, 陸上で生活する}\}$

$a \wedge g = ag = \{\text{水を必要とする, 動きまわる}\}$

$a \wedge h = ah = \{\text{水を必要とする, 脚・鰓がある}\}$

同じ集合を表す  $ag$ ,  $ah$  の二つはいずれか一つを残す。いずれを残してもよい。図2では  $ag$  を選択している。

他の組合せが図上に描かれるかどうかは下位のノードとの関係から決まる。

以下同様に三つの属性からなる集合の包含関係で互いに含まれないものはつぎの三つだけである。 $acd$  をノードとしなければならないので、その上位に  $ad$  をノードして描くことになる。なぜなら、下位のノードは上位ノードの論理積であるからである。

$a \wedge c \wedge d = acd = \{\text{水を必要とする, 陸上で生活する, 葉緑素がある}\}$

$a \wedge b \wedge c = abc = \{\text{水を必要とする, 水の中で生活する, 陸上で生活する}\}$

$a \wedge g \wedge h = agh = \{\text{水を必要とする, 動きまわる, 脚・鰓がある}\}$

以上の操作を続けてゆけば、図2になる。

(4) 筆者は（古典）ギリシャ語を解しないが、原語 " $\delta \iota \alpha \tau \rho \iota \beta \eta$ " = *diatribe* を三つの日本語訳（森真一、今林万里子、山本光雄）がいずれも「場所」と訳していることに納得がゆかなかった。なぜなら、リュケイオンが「場所」であることは自明であって、問題はソクラテスがその場所で何をするかであり、天職たる（哲学的）探求・研究がそれであるからだ。敢えてグアルディーニの翻訳から『孫引き』する所以である。

## 謝辞

得たいの知れない方法の試みを辛抱強くお聞きくださり、種々議論し有益なコメントをくださいました大國充彦、高橋徹、田中一各先生に記して謝意を表します。また、有益なコメントをして下さいました匿名の査読者にお礼申し上げます。

## 引用文献

- 足立幸男 (1984) 『議論の論理』木鐸社  
大國充彦、鳥居喜代和、長田博泰、田中一 (1999) 「社会情報解析—判決文における論理情報過程と価値情報過程の相互連関について—」, 社会情報学研究, 日本社会情報学会, No. 3, 63-76  
オルテガ (1925=1970) 「現象学の数滴」『芸術の非人間化』(オルテガ著作集3), 白水社  
神川正彦 (2000) 『価値の構図とことば』, 劉草書房  
桑子敏雄 (1999) 『環境の哲学』, 講談社学術文庫  
香西秀信 (1989) 『反論の技術』明治図書 (1995) 『議論の技を学ぶ論法集』明治図書 (1998) 『修辭的思考』明治図書  
R. グアルティーニ (1952=1968) 『ソクラテスの死』法政大学出版局  
長田博泰 (2001) 「価値基準の選択と論理構造の解析—最高裁大法廷判決文を例として—」, 社会情報学研究, 日本社会情報学会, No. 5, 81-90  
(2002) 「社会情報の語用論的解析—判決文における逆接／譲歩, 条件文の分析」, 社

会情報, 札幌学院大学社会情報学部紀要, Vol.11, No. 2, 41-52

(2003) 「『チャタレイ事件』判決における猥褻概念の論理分析」, 社会情報, 札幌学院大学社会情報学部紀要, Vol.12, No. 1, 113-128

野内良三 (2002) 『レトリック入門』

(2003) 『実践ロジカル・シンキング入門』大修館書店

C. ペレルマン (1977=1980) 『説得の論理学』理想社

(1976=1986) 『法律家の論理—新しいレトリック—』木鐸社

南方熊楠 (1970) 南方熊楠全集 7, pp.566-594 平凡社

三輪 正 (1972) 『議論と価値』法律文化社, 臨時脳死及び臓器移植調査会 (1992) 「脳死及び臓器移植に関する重要事項について (答申)」

G. レイコフ (1987=1993) 『認知意味論』紀伊国屋書店

渡辺慧 (1978) 『認識とパターン』岩波書店 (岩波新書)

(1986) 『知ること—認識学序説』東京大学出版会

C. Fox (2000) The Ontology of Language, CSLI Publications

B. Ganter, R. Wille (1999) Formal Concept Analysis, Springer

R.S. Hartman (1967) The Structure of Value: Foundations of Scientific Axiology, Southern Illinois University Press